YONEDA INTERVIEW

TOKYO 2020

東京オリンピック日本柔道男子チームドクターにインタビュー！

世界レベルのアスリートに対するメディカルサポート

2021年夏に、東京・日本武道館で行われた東京オリンピック［柔道］。その公式チームドクターとして、選手たちを試合前からサポートしてきた紙谷武先生にお話を伺いました。

試合当日に向けて、チームドクターはどんなことを行うのでしょうか？

最終合宿までに各選手のコンディションがどのような状態なのかをトレーナーやコーチから聞いておき、選手一人ひとりの診察を行います。MRIやレントゲンの他にエコーもよく使うのですが、実際に患部を動かしながら病態を説明できるので、選手自身も納得しやすいように感じています。痛みの原因や重症度が判明して出場が問題ないことが分かると、選手も安心して残りの練習に取り組めるようです。他に、合宿中に起こった脱臼の処置や、痛みが強い場合の痛み止めの注射なども、チームドクターが行います。

試合中のケガには、どのように対応をされていたのでしょうか？

試合中に行うことができるのは止血だけで、これはルールで決められています。また、同じ部位の止血を3回行った場合は失格となり負けてしまいます。出血が軽度であればまずワセリンで対応しますが、再度出血した場合はテープを施します。特に顔面など凹凸がある部位の止血は難しいケースもあるため、慎重に行わないといけません。

アスリートのサポートをする際、注意していることはありますか？

一般の患者さんでは問題とならないようなことが、アスリートにとっては致命的な問題となることもあります。特定の技をかけるときだけ患部が痛む場合などは、患部が痛まない方法や代わりとなる技の提案などを、選手と一緒に考えていくこともあります。これには、競技への深い理解や経験を必要とするのですが、自分は小学1年生から柔道をしてきたこともあり、様々な状況でも臨機応変に対応できるようなアドバイスを心掛けています。ケガをすると落ち込んだりふさぎ込んだりしてしまう選手も多いので、できるだけ選手に寄り添って治療を受け入れてもらえるようにしています。

チームドクターになったきっかけは？

医師を目指して勉強をしていく中で「柔道の経験を生かして世界で活躍するアスリートのケガや障害をサポートしたい」と考えるようになりました。柔道の全国大会を観に行った際、たまたま恩師から全日本のチームドクターに誘っていただけたことがきっかけで、北京五輪で女子ロンドン五輪・リオデジャネイロ五輪・東京五輪で男子のチームドクターを務めることになりました。

トレーナーとチームドクターはどのように関わっていますか？

日々のケアのほとんどはコーチ陣とトレーナーが担っていて、選手との信頼関係が築かれています。なので、医師には言えなくてもトレーナーには不調や痛みなどの相談を気兼ねなく相談できるんですよね。トレーナーは選手のコンディションを整えるだけでなく、選手の体調に関する情報提供という点で医師とのかけ橋になってくれています。医師とトレーナーの連携がうまくいかないと、選手のメディカルサポートは成り立ちません。実は、練習や試合を休むよう指導されたくないので選手はなかなか診察を受けたがらないのですが、そこをトレーナーがうまく説明して、潤滑剤となってくれるんです。

73 kg級金メダリストの大野将平選手と紙谷先生。東京での練習時は、何か身体にトラブルがあると先生のところへ相談があったそうです。

スポーツトレーナーを目指す若者たちへメッセージをお願いします。

自分の関わった選手が活躍している姿を見られるのは、自分にとって最高の喜びです。それは規模の大小に関係なく、中学・高校や地方の大会でも一緒ですね。でも、勤務先で患者さんを待っているだけでは足らないと思うんです。練習場所とか道場とか、そういう現場に出向いて、選手がどんな環境でどんな動きをしているのか、何で困っているのかを知ることが大事。現場に行くと大抵は「実はここが痛いんです」という相談を数件受けるので、そこで診察したり検査を勧めたりします。これって、早期発見・早期治療に繋がるんですよね。早期であれば短期間の休養で完治することもあるけど、病態が進行すると休むだけでは治らなくなっちゃうこともあるんです。この微妙なタイミングで治療の一手が遅れてしまうのを、現場に出向けば防ぐこともできる。それに現場でしか得られない経験というのもたくさんあるので、どんどん現場で体験し貪欲に吸収していってほしいです。

66 kg級金メダリストの阿部一二三選手と紙谷先生。表彰後、 阿部選手自ら先生の首に金メダルを掛けてくれたそうです。

ナショナルチームという世界レベルの選手をサポートする紙谷先生。普段は米田病院での外来診療・手術のほか、東海学園大学スポーツ健康科学部教授、米田柔整専門学校講師として忙しい毎日を送られています。

多忙な中でも、日々のトレーニングで体調管理を徹底し、地域の柔道場へ足を運び現場との接点を大切にされる紙谷先生。本取材にも丁寧にご対応くださり、人柄の良さが伝わってきました。

KAMITANI TAKESHI

紙谷 武 先生

医療法人米田病院
外来診療 / 手術（整形外科）
転倒予防教室

米田柔整専門学校
整形外科学 講師

LICENSE

医師
日本整形外科学会整形外科専門医
日本臨床スポーツ医学会代議員
日本スポーツ協会公認スポーツドクター
講道館柔道六段

CAREER

東京オリンピック日本柔道男子チームドクター帯同
北京・ロンドン・リオデジャネイロオリンピックチームドクター帯同
全日本柔道連盟医科学副委員長・強化委員
東海学園大学 スポーツ健康科学部 教授
米田柔整専門学校 整形外科 講師
全国高等学校柔道選手権大会 無差別級 3 位
全国中学校柔道大会 中量級 優勝